

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 23日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21760502

研究課題名（和文） アルド・ファン・アイク研究  
——近代建築思想における新たな視座の獲得へ向けて研究課題名（英文） Study on the Thought of Aldo van Eyck  
——An attempt to acquire the new viewpoint for architectural thoughts in modern age.

研究代表者：朽木 順綱（KITSUKI Yoshitsuna）

京都大学・大学院工学研究科・助教

研究者番号：50422994

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、建築家アルド・ファン・アイクによる思想の構造的解明を主題として、その言説と作品についての考察を行った。まず前者については、本研究代表者がこれまで取り組んできた研究を継承しつつ、新たな課題として建築・都市における空間と時間との関わり合いについてのかれの論考の分析を行った。抽象的な空間と時間が具体的な「場所」と「場合」として捉え直されることを通して、人間によって経験され生きられる建築的事象が「場合のための場所」という、時間的契機を含んだ空間の問題であることが明らかとなった。こうした時間的契機を通して、建築・都市とは、当座の視覚を超えた多様な意味を伴って経験されることが示された。このことは、いわば空間についての視覚的理解のみに終始した近代主義建築を、人間の心的経験に彩られたより豊かな次元へと開く試みであったといえよう。一方、作品についての考察としては、かれ自身の作品をはじめ、晩年のファン・アイクが関心を向けたギリシア建築家 D.ピキオニスの作品の視察を通して、1970～80年代すなわちファン・アイクの後期思索における関心の所在について示唆を得た。とりわけ、前期思索で展開された、建築の経験主体による実存的な「場所」「場合」のさらなる始原としての他者性の問題が、「開け」や「光」を鍵語として主題化されてゆく経緯を作品のうちに読み取ることができた。

## 研究成果の概要（英文）：

This research made inquiries into Aldo van Eyck's statements and works under the subject of the clarification of structures in his architectural thoughts.

On the one hand, concerning his statements, following the former studies of ours, a new study on his discourses was developed in the light of the relation between space and time in architectures and cities. It is revealed that there was the particular structure as "a place for an occasion" with his keywords "place" and "occasion", which was the vivid spatio-temporal architectural phenomenon experienced or lived by human being, and that this structure harbored temporal aspect within special meaning. Through this aspect, architectures and cities are experienced with multiple meanings beyond the immediate visibility. These concepts could be realized as his attempt of conquering the modernists' old thought hung up within the limit of visual perception and opening up the possibilities of the multi-colored dimension based on mental experiences of human.

On the other hand, concerning his works, some study tours were made through visiting his works and D. Pikionis's works in which van Eyck had interest in his late years. Those works brought about some implication to the study on his thought in his late years or 1970-80s. In detail, these works represent the his concern to others (other persons), which is assumed to be the foundation of his former "place" and "occasion" as existential concepts kept in subject of experiences. It is mentioned and topicalized with his keywords "openness" and "light" in architectural works. His "openness" could be regarded as the generative status of spatial phenomenon.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学，建築史・意匠

キーワード：アルド・ファン・アイク，近代建築，建築論

### 1. 研究開始当初の背景

建築家アルド・ファン・アイク (Aldo van Eyck, 1918-1999) は、オランダ近代建築を代表する建築家であり、20世紀後半の国際的建築運動を主導した建築家としても知られる。とくに1929年より発足したCIAM (近代建築国際会議) への批判的参加、およびCIAMの批判的継承者としてのチーム10グループの結成、および同集会の開催をおして、かれは建築における近代とはいかなる時代であるのかを問い続けた。一方、20世紀後半に主潮となる、いわゆるポスト・モダニズム運動に対しては、かれはこれを歴史の誤読であるとして厳しく斥け、世紀の初頭に先駆者たちによって拓かれた成果を正しく評価すべきことを主張した。かれは近代建築を、たんに肯定するのでも、否定するのでもない。かれは近代建築における、表層的な盲従、批判のための批判、これらの両者がいずれも無反省のままに形式化され、主義と化していることを批判するのである。

本応募者はこれまで、ファン・アイクの言説を読み解くことにより、その独自の思索の構造を明らかにしてきた。とくに、近代建築運動のなかで発語された、いくつかの鍵概念と図式をめぐって、その独自性を明らかにするとともに、かれの企図する意味の解説をおこなってきた。たとえば「イメージーション」とは、20世紀初頭の近代芸術に共通してかれが見出した方法概念であり、芸術における「イメージーション」をおして描き出される世界が、絶えず変容し、更新されることが明らかにされた (制作論への問い)。また、こうした「変容」の相のもとでの、世界の事物と人間とが出合う圏域として、身体的経験を基底とする「場所」が成立すること、およびいま・こことしての「場所」経験に伴って、時間的契機すなわち「場合」概念が提示されることが解き明かされた (空間論への問い)。また、建築・都市におけるこうした「場所」

の集合に関わる問いとして、部分と全体との同時実現、内部／外部や、運動／静止などの対概念を「対現象」として「和合」し、重層化する多中心的な構成概念「コンフィギュレーション」の構造を読み解いた (空間構成論)。このほかにも、人間と社会との関わり合いのあり方 (建築家論) など、これまでに得られた成果は建築をめぐる多様な側面に少なからぬ新知見を提供するものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、上述の背景に基づき、ファン・アイクの建築思想についての考察をさらに推し進め、近代建築についての反省的視座から読み解き、その今日的意義を明らかにすることを目的とする。

ファン・アイクの建築思想の背景には、学生時代を含む8年間 (1938-46) を過ごしたスイス・チューリヒでの、近代芸術家たちとの直接的な交流を挙げることができる。戦禍を避けてチューリヒに集うJ. ジョイス, T. ツアラ, H. アルプら、20世紀を代表する前衛芸術家との交わりは、世代を隔てながらもかれが同時代人として近代の本質を理解することを可能にした。ゆえにかれにとって近代建築とは、世紀末を迎えてもなお過去となることなく、有意なものとして生き続けたのである。前世紀末の転換期を目撃した先駆者たちの思索を真に受容し、次世紀へと正しく継承すべき自らの立場を、かれは自認していたであろう。かれの生涯は、いわば20世紀とともに生き、21世紀へと架橋する仲介者としての、特異な世代に位置づけられるのである。

こうした意味において、ファン・アイクの思索を問うことには、たんに一建築家の思想研究にとどまらない、広範な成果が期待できるであろう。21世紀初頭にある現代、いわゆる近代主義がその限界を指摘されて久しい。とくにわが国においては、物的な居住環

境が急速に整備されるなかで、建築物と景観との調和、建築家の倫理など、人間がいま・ここに住まうことの意味への質的問いが、今日に至るまで重視されないままであった。こうした状況が、近代建築のいかなる側面によってもたらされ、一方で、いかなる側面がこれを打開しうるのか。事態の解決は、近代建築への反省なしには不可能である。20世紀中葉にいち早く「エコロジー」の概念を提示し、また、建築を人間にとっての「故郷」であると捉えるファン・アイクの思索は、こうした反省的視座を、21世紀を拓かねばならぬわれわれに与えてくれると期待される。

### 3. 研究の方法

本研究代表者によるこれまでのアルド・ファン・アイク研究を継続、発展させることを企図し、本研究は、下記の2つの方法によって遂行される。

#### (1) ファン・アイクの思索における思想的基盤への問い——空間論から時間論への展開を鍵として

これまで本研究代表者は、ファン・アイクの制作論、空間論的な諸側面からの思索解明を行ってきた。しかしながら、本来これらは各々を分節して論じるものでない。たとえば、たとえば、「場所」「場合」の対概念における空間・時間相互の補完的關係がファン・アイク自身によって予見されているように、かれの思索の独自性として、建築的経験における時間的契機への関心が注目される。とくに、「記憶」や「予期」を伴う心的な「連合」作用への言及など、こうした問いには、建築をとおした、人間の実存への全的な問いが見出される。こうした哲学的な問いは、かれのどのような思想的基盤から形成されたのか。かれが参照したとされる哲学者（M. ブーバー、H. ベルグソン）などへの参照、および現代思想における議論からの検証をとおして、建築家＝思想家としてのファン・アイクの実像を明らかにする。

#### (2) ファン・アイクの作品への問い——空間構成に注目して

建築家の思索を解読することは、いわば作品生成への前史を明らかにすることであるといえる。建築家は自らの思索を作品へと具現化することで、その意図を表明するからである。よって、これまでの本研究の成果をふまえてはじめて、ファン・アイクの作品における独自性を明らかにすることができるであろう。考察は表層的な形態ではなく、空間構成、すなわちかれのいう「コンフィギュレーション」の構造がいかに実現されたかを問う。いわば、作品ごとの個別性や差異性を論じるのではなく、これらに通底する普遍性や

同一性を見出すことを目的とする。こうした同一性こそが、かれの思索と作品とを切り結ぶ交叉点を支持しているからである。

### 4. 研究成果

本研究は、先述の通りファン・アイクによる思想の構造的解明を主題として、その言説と作品についての考察を行った。

まず前者については、本研究代表者がこれまで取り組んできた研究を継承しつつ、新たな課題として建築・都市における空間と時間との関わり合いについてのかれの論考の分析を行った。抽象的な空間と時間が具体的な「場所」と「場合」として捉え直されることを通して、人間によって経験され生きられる建築的事象が「場合のための場所」という、時間的契機を含んだ空間の問題であることが明らかとなった。こうした時間的契機を通して、建築・都市とは、当座の視覚を超えた多様な意味を伴って経験されることが示された。このことは、いわば空間についての視覚的理解のみに終始した近代主義建築を、人間の心的経験に彩られたより豊かな次元へと開く試みであったといえよう。

以上の考察の成果は、日本建築学会計画系論文集への投稿論文としてまとめられ、査読の結果、採用が決定した（『アルド・ファン・アイクの建築思想における時間概念について——「経験」の構造に関する分析を通して』、日本建築学会計画系論文集、第77巻第676号、2012年6月、pp.1489-1498）。本論文では、ファン・アイクの言説の分析を通して、かれの建築思想における時間概念について以下のような考察を行った。まず、かれの1950年代を中心とした初期論考における鍵概念「経験」の構造を分析し、かれが時間にもどのような資質を見出したのかを解明した。考察にあたり、とりわけJ. ジョイスの文学作品『フィネガンズ・ウェイク』へのファン・アイクの参照が注目される。この文学作品で描写される情景が、神話的、歴史的な

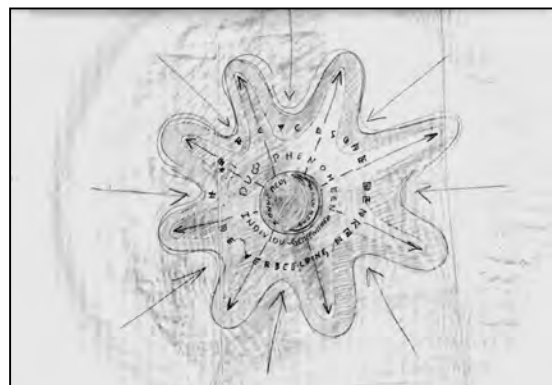


図1 ファン・アイクによる素描 (Strauven, F. et al. (ed.), Aldo van Eyck Writings, volume 2, Collected Articles and Other Writings, SUN Publishers, 2008, p.285)

時間の錯綜構造を有することを手がかりに、近代芸術にファン・アイクが見出した、作品の時間的構造の読み解きを行った。つぎに、「人間のイメージにおける」空間と時間として「場所と場合」を提唱した1960年代の思索において、初期の時間概念がどのように展開したのかを明らかにした。とくにベルグソン哲学への関心を背景としてかれが提示する「奥行」「パースペクティブ」「持続」などの意味を読み解き、これらが必ずしも空間的な意味でのみ用いられるのではなく、むしろ、先に見たジョイスの文学作品にも通じるような、人間の心的内部における時間的経験の重層化をも可能にする次元を開示するような概念であることを明らかにした。そして最後に、こうした時間概念が建築・都市の具体相においてどのように見いだされうるのか、かれの都市風景の描写の読解を行い、建築・都市空間における時間的意味の可能性を問うた。そして、かれの鍵概念である「対現象」が有する、対立概念の調停あるいは同時実現は、先述の時間的経験の重層化に相關することで可能になることを、近年公開されたかれの60年代の素描(図1)のうちに読み取りつつ、本論文の総括を行った。

一方、作品についての考察としては、Schmela Haus (デュッセルドルフ, 1967-71, 図3)をはじめ、晩年のファン・アイクが関心を向けたギリシア建築家D. ピキオニスならびにA. ロダキスの作品(図4)の視察を通して、1970~80年代すなわちファン・アイクの後期思索における関心の所在について示唆を得た。とりわけ、前期の思索で展開された、建築の経験主体による実存的な「場所」「場合」のさらなる始原としての他者性の問題が、「開け」や「光」を鍵語として主題化されてゆく経緯を作品のうちに読み取ることができた。

こうした成果の一部については、日本建築学会・近畿支部研究発表会ならびに全国大会学術講演会などにおいて、梗概の提出、口頭での発表を行った。これらの一連の発表を通して、抽象的な空間概念に基づいた近代主義建築の限界を乗り越えるべくファン・アイクがかつて提示した「場所」概念を、自ら乗り越えるための概念として着想されたのが「開



図2 (左) Schmela Haus (撮影: 朽木順綱)  
図3 (右) ピキオニスによる教会 (撮影: 同上)

け」であること、「開け」とは、「場所」成立の主要な契機である「圍繞」に先行して、主体的な経験次元とは位相を異にした超越的な事柄であること、こうした超越性を他者性」の問題として理解することで、晩年のファン・アイクの建築作品において強く主題化されることになる都市性の理解へと接続しうることが見定められた。また、同時期にファン・アイクが関心を寄せた近代ギリシアの建築家D. ピキオニスの作品についても考察を行い、ピキオニスの作品や思索が有する歴史性や自然環境との調和、外部性などという資質が、ファン・アイクのいう「開け」に相關する内部(実存)と外部(他者)との相互包摂のありかた、いわば、内部における不在による開け渡し、歓待というしかたによって逆説的に浮上する真の他者性として解釈しうる可能性を指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想における時間概念について——「経験」の構造に関する分析を通して, 査読あり, 日本建築学会計画系論文集, 第77巻第676号, 2012.6, pp.1489-1498
- ② 近藤康子, 朽木順綱, 岸和郎, 堀口捨己の建築思想に関する研究——茶の湯研究に見出される制作の問題, 査読あり, 日本建築学会計画系論文集, No. 665, 2011.7, pp.1329-1336
- ③ 高取愛子, 朽木順綱, 高松伸, バワの建築思想における'life'の意味——ジェフリー・バワ研究(その1), 査読あり, 日本建築学会計画系論文集, No. 663, 2011.5, pp.1011-1019

[学会発表] (計17件)

- ① 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの時間論と都市論をめぐって, 建築論研究会(招待講演), 2012.3.31, 京都大学
- ② 朽木順綱, 建築の多様性に向けて(アルド・ファン・アイクの思想と作品を通して), 連続レクチャー「建築の20世紀」(招待講演), 2011.10.28, アトリエ C A S A
- ③ 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——1980年代における鍵語「虹」の具現化について, 日本建築学会大会学術講演会, 2011.8.24, 早稲田大学, 梗概集・F-2, pp.823-824
- ④ 近藤康子, 朽木順綱, 岸和郎: 論考「茶碗の生と躰」における「生」と「心」について——堀口捨己の建築思想の研究4, 日本建築学会大会学術講演会, 2011.8.24, 早

- 稲田大学, 梗概集・F-2, pp.793-794
- ⑤ 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——1980年代における鍵語「虹」について, 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2011.6.18, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第51号・計画系, pp. 801-804
  - ⑥ 近藤康子, 朽木順綱, 岸和郎: 茶の湯における「構成」の実践的側面——堀口捨己の建築思想の研究3, 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2011.6.18, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第51号・計画系, pp. 793-786
  - ⑦ 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——1980年代における鍵語「透明性」について, 日本建築学会大会学術講演会, 2010.9.10, 富山大学, 梗概集・F-2, pp. 807-808
  - ⑧ 近藤康子, 田路貴浩, 朽木順綱, 「生活構成」としての茶の湯について——堀口捨己の建築思想の研究1, 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2010.6.20, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第50号・計画系, pp. 801-804
  - ⑨ 法澤龍宝, 田路貴浩, 朽木順綱, 『スイス建設新報』にはじまる建築論争について——ハンス・シュミットの建築思想研究1, 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2010.6.20, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第50号・計画系, pp. 813-816
  - ⑩ 安東美穂子, 田路貴浩, 朽木順綱, アルヴァー・アールのヴォクセニスカの教会の設計過程, 日本建築学会近畿支部研究発表会, 2010.6.20, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第50号・計画系, pp. 817-820
  - ⑪ 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——後期思想における「開け」と「光」, 日本建築学会大会学術講演会, 2009.8.27, 東北学院大学, 梗概集・F-2, pp. 663-664
  - ⑫ 法澤龍宝, 朽木順綱, 田路貴浩, ハンス・シュミットの建築思想 「新しい建設」における「生」の概念について, 日本建築学会大会学術講演会, 2009.8.27, 東北学院大学, 梗概集・F-2, pp. 661-662
  - ⑬ 近藤康子, 朽木順綱, 田路貴浩, ル・コルビュジエの“La ville radieuse”における自然観の考察——「蛇行」の分析を通して, 日本建築学会大会学術講演会, 2009.8.27, 東北学院大学, 梗概集・F-2, pp. 659-660
  - ⑭ 寺田和彦, 田中明, 朽木順綱, 田路貴浩, 坂倉準三の住宅作品の特質と「建築精神」, 日本建築学会大会学術講演会, 2009.8.27, 東北学院大学, 梗概集・F-2, pp. 631-632
  - ⑮ 近藤康子, 田路貴浩, 朽木順綱, ル・コルビュジエの“La ville radieuse”における自然観の考察——図式の分析をとおして, 日本建築学会近畿支部研究発表会,

- 2009.6.21, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第49号・計画系, pp.797-800
- ⑯ 朽木順綱, アルド・ファン・アイクの建築思想——1980年代における鍵語「開け」について, 2009.6.21, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第49号・計画系, pp. 793-796
  - ⑰ 法澤龍宝, 朽木順綱, 田路貴浩, ハンス・シュミットの建築思想——1920年代における「ヴェルク」誌での言説をとおして, 2009.6.21, 大阪工業技術専門学校, 研究報告集第49号・計画系, pp. 789-792

〔図書〕(計4件)

- ① 朽木順綱, 『もうひとつの京都』京都工芸繊維大学美術工芸資料館企画展カタログ所収, 「京都大学総合体育館」を読む——増田友也の思想と作品, 松隈洋総括(著者数10, 総頁数223), 京都工芸繊維大学, 2011, pp.106-109
- ② 朽木順綱, 『アクティビティのかたち——都市をルールからデザインするー』所収「都市の始まり/建築の果て」, 京都建築スクール編(著者数13, 総頁数119), 建築ジャーナル, 2011, pp.43-45
- ③ 朽木順綱, 『境界線のルール ルールのデザイン/デザインのルール 2009』所収「都市に研する響き」, 京都建築スクール編(著者数6, 総頁数64), 建築ジャーナル, 2010, pp.12-13
- ④ 朽木順綱, 『テキスト建築の20世紀』所収「ル・コルビュジエ 遍在する身体」(第7章)および「経験の多様性へ向けて 近代建築への懐疑と超克」(第11章), 共著, 本田昌昭, 末包伸吾編著(著者数7, 総頁数238), 学芸出版社, 2009, pp. 109-125, 176-189

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

朽木 順綱 (KUTSUKI Yoshitsuna)  
京都大学・大学院工学研究科・助教  
研究者番号: 50422994

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし